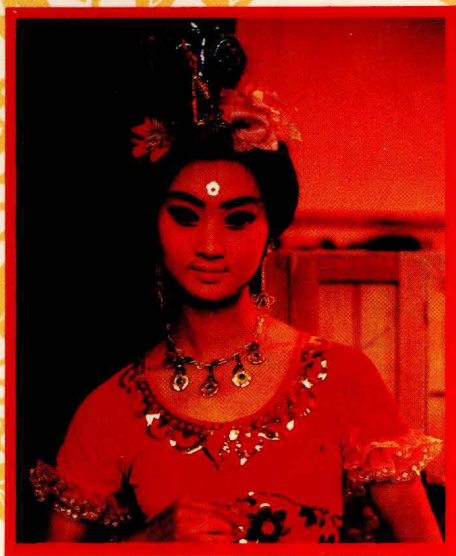


中国古典詩聚花

女性と 恋愛



前野直彬 監修
野口一雄 著

前野直彬 監修
野口一雄 著

中国古典詩聚花

女性と恋愛

10



中国古典詩聚花 女性と恋愛

⑩

昭和五十九年七月二十日 初版第一刷発行

定価一四〇〇円

著者

野口 一雄

発行者

相賀 徹夫

発行所

株式会社 尚学図書

112 東京都文京区後楽二―一五―一
電話 編集(〇三)八一五―四一三五

発売所

株式会社 小学館

101 東京都千代田区一ツ橋二―三―一
電話 業務(〇三)三三〇―五三三三
販売(〇三)三三〇―五七六四
振替口座 東京八一二〇〇

印刷所

株式会社 東京印書館

© Shōgakutosyo 1984

Printed in Japan

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

*落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-09-915010-0

目次

解説……………五

I 少女——天寵の美……………一七

少女に与う

韋 莊 六

思う所有り

賈 會 哭

幼女詞

施 肩 吾 三

春女怨

朱 絳 五

嬌女詩

左 思 三

新月を拝す

李 端 五

無題（八歳像照鏡）

李 商 隱 元

楊氏の女を送る

韋 處 物 五

女を哭す 三首 其の二

高 岑 四

II 恋 愛——愛の種々相……………六

相思

王 維 三

上 邪

無名氏 七

宮詞

花 藥 夫 人 四

長恨歌

白居易 九

機を詠ず

半睡

鵲橋仙

妓を懷う

節婦吟

無題 (相見時難別亦難)

杜牧 一

韓偓 三

秦觀 二

劉禹錫 二四

張籍 二七

李商隱 二三

板橋曉別

贈別 二首 其二

送別

多情

偶題

李商隱 三

杜牧 三

魚玄機 三

韋莊 三

羅隱 三

III 結

婚

—乙女から女性へ……………三五

東方の日

内に贈る

詩經 二七

白居易 一五

烏孫公主の歌

劉細君 一四

IV 夫

婦

—愛の座標……………一四

暮れに山中に帰る

瑣窓雜事 二首 其一

内に示す

藍仁 一五

龐婉 一五

沈受宏 一五

内に贈る

内に贈る

内人の生日

白居易 一五

一五

吳嘉紀 一五

小兒

秋夜 内に示す

蘇軾 一五

方文 一六

内に贈る

征夫詞・征婦詞

李白 一六

劉績 一六

V 生別離

—別離と慕情……………一九

艷歌何嘗行

新婚別

月夜

長干曲 四首

商人の婦

内に寄す

無名氏 一七

杜甫 一八

杜甫 一八

崔顥 一八

謝翱 二〇

高其倬 二五

夜雨 内に寄す

灞橋にて内に寄す 二首

悼亡詩

灞橋

中秋 獄中の作 老妻に寄す

内を送る

李商隱 二六

王士禛 三二

三六

三六

萬夔輔 三七

陳師道 三三

VI 死別離

—追憶の愛……………三七

傷往 二首

出還

三たび悲懷を遣る 三首

庾信 二三

韋應物 二三

元稹 二五

悔恨

懷悲

江城子

韋莊 二四

梅堯臣 二四

蘇軾 二四

悲遣 十三章 其の九

王彦泓 三

亡姫を悼む 十二首 其の十一

厲鶚 三

悼亡詩

李必恒 三

葛生

詩經 三

内子王華姜を哭す 十二首 其の十

屈大均 二

征婦怨

張籍 六

付録

作者索引

二七

詩題画数引き索引

二七

凡 例

(1) **読み下し文** 本書では、原詩は旧字体を用いたが、読み下し文は、常用漢字を用いるとともに、すべての漢字に読みがなを施して読みやすくしてある。

(2) **押韻** 本書では、詩の形式とともに、語釈の項の末尾に韻字を示してある。また換韻の箇所は『を用いて示した。(唐代以降の詩については、韻目を平水韻によって示してある。)

(3) **長詩について** 本書では、興味深い長い詩を数多くとり上げているが、長詩の場合には、ポイントを落として幾章句かに分け、口語訳を読み下し文の下に対応して示したり、語釈もその章句ごとに付すなど、

(4) **詞**には特に「参考」の二字をつけて、詩型の区別がわかるようにした。

読解しやすいように便宜を図ってある。

解 説

I はじめに

女性と恋愛 ここにあるのは、三千年にわたる文学の歴史をもつ中国人が、女性と女性に関することどもを、どのように認識してきたかの記録である。

私はいま、女性に関することどもと言ったが、それはおもに、もうひとつの性、男性が女性とどうかかわってきたかの記録——恋愛——が中心となるだろう。『中国古典詩聚花^{しゅうか}』の第十巻にあたるこの巻を「女性と恋愛」と題したゆえんである。

中国の恋愛詩の偏向 記録は中国語でしるされた故に、中国人の思考がもつ偏向が、とうぜん色こく見られることになった。それはことに「女性と恋愛」のこの分野においていちじるしく現れているように思われる。弱者のかばそい吐息であったがために、中国文学史における恋愛の詩は、中国文学がかかえた矛盾の集約的表現ともなっているのである。

II 政治の反極

中国文学の環境 古典中国の世界では久しいこと、文学と政治とが不可分の関係にあった。文学が政治に従属しても不思議がられない伝統があった。

このような環境にあつて、中国文学は自己独自の領域をどこに切りひらいてきたか。その回答に当たるものがこの巻である。たったひとつ、これだけは文学の正當な領域として守つてきたものに、人間の自然な感情発露である恋愛のテーマがあつた。これこそまさしく、政治が容喙することを許さぬ文学最後のとりでといつてよい。何故ならば事柄はすぐれて個に関わる問題だからである。

暗い時代に生を養わざるをえなかつた詩人のあるものは、この分野にこそ自分たちの人間としての最後の尊嚴をみとめようと努力してきた。恋愛詩がアウトサイダーの文学であることの意味を体制につきつけて、自己の鋭い文学主張に轉換しえた、文学にとっては幸福な、文学者にとっては不幸な時代があつた。李商隱や杜牧などの、唐代の半ばから末にかけての恋愛詩人たちが生きた時代がそれである。

恋愛至上主義 女性の作者の立場からすると状況はどうであつたか。

礼教がたてまえの社会制度下において、女性が自分の人格を主張するてだては、女を最も端的な形で打ち出すことであつた。つまり恋愛を實踐することである。唐代中期以降の女流詩人たち、例えば魚玄機の奔放な生きかたがこれにあたる。

彼女らの生きかたには、初唐期に宮廷を生活の場とした女官たちのそれと対蹠的なものがあつた。恋に全生命を賭けたそのエネルギーが、詩を通して一千年後の我々をうつ理由がここにある。

このように、女流もふくめて中唐や晩唐の詩人たちは、自己を恋愛にのめりこませることで、一身の保全と主張とを兼ね行おうとした。比較的温和な詩人である白居易ですら、その「長恨歌」において、「肉体はこの人の世の有為転変をまぬがれず有限であるけれど、愛はそれを超えてなお無限の存在である」と宣言している。

政治の反極としての恋愛詩、これが中国の恋愛詩がもつ偏向の第一である。

III 伏流の文学

礼教の拘束 中国の文学者たちは、愛情のテーマを自己の文学表現に組み込むのに躊躇して来た。しかし、この事実からすぐさま、中国の文学者たちが愛情を表現することに関心がなかった、と決めてしまふのは正しくない。最後に述べるように事態はむしろその反対である。愛情をテーマとする文学の流れが表だっては出なかった、というだけのことにしかなさない。恐らく中国の文学者たちは並はずれて内気であつたのだろう。

これにはひとつの理由がある。いやしくも士大夫階級たるものには、たてまえとして遵守せざるをえない礼教の拘束がある。詩人もまた士大夫の一員である。たてまえからはずれる言動を示す者は、容赦なく階級から切りすてられた。花柳の巷に沈湎し、「浅酌低唱」(鼻唄まじりのほろよい機嫌)を標榜した北宋の詞人、柳永が士大夫階級からつまはじきにされたのが、その好い例である。

柳永が礼教に逸脱したから士の階級から切り捨てられたのか、それとも士の階級から切り捨てられたから色街に放蕩したのかは、鶏と卵の関係のようなものである。切り捨てる側からしてみれば、どちらでもよい問題であつたろう。

親愛感情の向けかた 一般に古典の中国人は妻に対するばかりではなく、家族の女性に対する愛情を書き留めるのをためらつた気配がある。肉親の間でも、兄弟愛の方が、妻や妹への愛情表現よりも優先した。例えば妹に寄せる情愛については、安禄山の一味にとらえられて長安に拘禁中の杜甫が、妹の身を案

じて作った「元日」の詩や、六朝期りくちようの著名な例では、宋の鮑照ほうしやうが妹に与えたしみじみとした手紙がすぐ念頭にうかぶ程度である。

情愛のなかでも、異性に対する愛情よりは、同性への友情が強調される結果となった。これは士のたしなみとでもいったものであつたろう。そうしてみると、士大夫もわりと不自由な生き物であるといえるかもしれない。恋愛感情を詠うたった詩篇は、中国文学の中でも丹念に掘りかえしさえすれば後でふれるように決して存在しなかつたわけではないのだが、ややもすれば伏流となつて文学者の感情表現の片すみにおしこめられてしまふ、これが偏向の第二である。

IV 表現形式

新形式の文学 第二の偏向はさらに第三の偏向をうんだ。

妻への愛情もふくめて、恋愛のテーマは多く真情の吐露とろにつながり、文学のさまざまなジャンルのうちでも、いやしいと見なされる様式の文学に、ことに直截ちやくせつにあらわれる。

民間で興った新しい様式の文学は、卑俗ではあるけれども、生活する民衆の逞たくましい息吹いぶきの所産であるため、豊饒ほうじやうな生命力をもっている。こうした下位の文学様式はやがて、文字を独占する階級である士の手によって採り上げられ、文学的洗練を加えられて、ひいては次の時代の文学の主流となった。そのとき、民間ではもうすでに新しい様式の文学が生まれ、そうして愛好されているのである。中国の文学史は大きくこのようなサイクルで動いてきた。

これは、地理的にも文化的にも鎖国状態にあつた中国が、自己の文学を産みだすエネルギーを、サイ

クル的に民間から汲み上げなければやってゆけなかった事情に起因する。

詞 蘇軾の例をみよう。本書に収めた「江城子」は、詞と呼ばれる新興の唄い物であった。当時のまっとうな様式の韻文は詩である。例えていえば、和歌に対する田楽とでもいう関係になろう。

なぜ蘇軾は自分の恋愛感情を、伝統もあり手なれてもいる詩の形式でなく、詞の形式で表現したのであるか。

これにはふたつの理由があると私は思う。

感情と様式・虚構の様式 ひとつには、恋愛感情は自己に密着した、なまみの感情である。表現技術的にはたしかに洗練されてはいても、その分だけどこか取り澄ました印象の強い文学様式より、たとえ粗野であつてもいきいきと血のかよった文学様式のほうが、なまみの感情を託しやすいであろう。

もうひとつには、楽府や詞は、ある約束ごとが前提されている。楽府も詞も、共に長短入りまじった句を一首の内にもつので、形式的にも詩と容易に区別されるが、内容的にも、ふたつの様式は、ある枠組みをまず設定しておいてうたう様式の文学である。

例えば、楽府の場合には、楽府の題そのものがあたえられた枠組みとなって存在している。また詞の場合にも、詞は艶情をテーマとするのだ、男女の色恋を詠うものだという前提が作者と読者の双方に理解されていて、その上になつてどのような有効な舞台設定をしてみせるかが、作者の技量であった。

愛情の表現が、主流としては楽府や詞などの、ある架空の舞台に架空の登場人物を設定してうたうジャンルに傾いたということは、これはフィクションであるという枠組みを、作者みずから読者とともに納得して、はじめて素裸になれたということなのであろう。恋愛は自分を素裸にしてこそはじめて表現し

うるテーマである。恋愛は自己解放なのである。恋愛を語ることでもまた。

楽府や詞 そこで私の今回の選集では、狭義の詩とともに、楽府や詞などの、いわば「まっとうでない」様式の文学をも一部含めることにした。楽府では「上邪」「艶歌何嘗行」「有所思」など、詞では「江城子」「鵲橋仙」などがそれである。これらもまた韻文なのであり、詩精神にささえられた文学宮為であるからには、広義の詩に入るのである。

V 歪んだ理解

道徳的解釈 上述の偏向は読み手の側に更に第四の偏向を附随させた。

叙事が完全に欠落している抒情の詩において、応々みられることだが、こうした詩では、それが創られる動機となった作者に固有の体験や事情が、直接語られぬまま詩の背後に秘められてしまう。このときその詩にことさらに別な観点をもちこんで解釈しようとする態度があった。男女を詠った詩はすべて忠孝節義にねじまげて解釈される結果をまねく。何故なら女性を対象とする恋愛感情を、主君を対象とした讚美の感情にずらしさえすればよいからである。

詩解釈の伝統的態度 中国最古の歌謡集である『詩経』（本巻では「東方之日」や「葛生」など）に収め

られたある詩が、漢代の古い解釈と宋代の新しい解釈とでは、しばしばまるで食い違ふのは、このことを理解すれば不思議なことではない。また、詞は民間の俗謡を母胎にみぎあげられた文学様式であったから、男女の情をのべたものが当然おおいのだが、それすらも古典的態度の注釈家たちは、たてまえ

として忠臣愛国にすりかえざるをえなかった。

清の陸以謙が『詞林紀事』に与えた序文にもこの立場は端的にうかがわれる。

郝氏は嘗てこのように述べている。男女のことを詠じた詩が『詩経』に多い理由は、夫婦は人道のはじめであるから感情は男女に於て最も甚しく、羞恥心は閨室に於て最も大きい。礼儀は閨室に於て最も深い。そこで男女に託してうたをうたえば最も人を感動させやすい、と。であるから閨室の瑣末な事柄の描写も全て忠孝節義のこととして受け取り、白粉だの酒だの花のもとでのさんざめきだのとみてはいけない。

しかし、こんな論議だてがこんにちの我々に何らの説得性をもたぬことはいうまでもない。そのようなのである。いかに糊塗しようとも、郝氏がすでに説破しているごとく、それでも「詩には男女の詠多し」なのである。

愛情の文学をもたぬ文学など、世界の文学史のどこにも存在しないであろう。我々も、注意をして、これから、中国文学史の中に愛情を求めて散策しようではないか。

VI 少女から女性へ

性差別「女性と恋愛」、このテーマからは様々な可能性が引きだせた。例えば社会的にも性別的にも種々の圧迫をこうむってきた女性自身の叫び、という観点から女性みずからの作品をあつめることも可能だった。政略結婚の犠牲にされた劉細君の「烏孫公主の歌」はその一例である。

女であるがゆえの不利益は、中国の女性につきまとうてきたものである。千二百年前にすでに唐の詩

人、白居易はこう述べている。

人と生まれて婦人の身に作る莫れ

百年の苦楽、すべて他人に由るがままなれば

戦乱と妻 結婚したかと思うと、赤紙一枚で夫と引きさかれる新妻もいた。杜甫の「新婚別」である。出征兵士の妻の嘆きは今も昔も変わらない。「征婦詞」をみよ。今はなつかしい言葉を残して征った夫（「征夫詞」）の妻のもとには、やがて、一枚の紙切れと、カタコトうそ寒く鳴る白木の箱とが届ける定めとなっていた（「征婦怨」）。残された女にできるのは、亡き夫の墓の前でかきくどくことではない（「葛生」）。こうしたうたどもは、ここにごく一部しか載せられなかったのを残念におもう。

女性と恋愛 本書において結局は、女性が誕生し、美しく生いたち、恋をし、結婚をし、家庭生活を完遂する、いわば女の一生を詩でつづることになった。言い換えるならば、これは、少女から女性へと、女を共通の軸にすえつつ、性として女を賦与された一個の人格が、女としての全面を開示してゆく過程を、中国人がどう文学化してきたかの通覧となった。このとき、その全面開示のひきがねとなりうるのが恋愛のいとなみなのである。

VII 恋愛詩の中国の特性

千篇一律 どんな社会体制にあっても、若者たちの心を深くとらえるのは、甘くやるせない恋の唄である。人はそれを千篇一律とけなすかもしれない。しかし千篇一律であって何がいけないのだろう。表面上の不変化とみえるものは、人間にとってこの問題が永遠に新しい提起なのだというを示してい

るにはかならない。人のさまざまな心のありようのうちで、恋愛感情だけは共有しうる最後のものだという信頼を、無数の千篇一律の恋唄が示してくれているのではないだろうか。

普遍性の確認 恋愛感情に千古不変なものがある以上、これを時代順にならべて紹介することはあまり意味をもたないであろう。そこでこの選集を編むにあたり、私はこれを一旦ばらばらにしたうえ、時代順を無視して内容別にならべかえてみた。古典の中国人が女性および恋愛についてどう考えていたのかを、一枚の平面図に敷き並べてみたいと思ったからである。

恋愛に関しては時代も地域も越えて共通である事実を確認し、文化環境を超えた人間の普遍性への認識にたどりつく作業に、それはなるのだろうか。

しかしながら、私は恋愛感情の分野における文学の一貫性や普遍性について強調しすぎたかもしれない。三千年にわたり人間の精神のいとなみが、全く変化をみせなかったというのも信じがたい。恋愛詩の分野で、どのような進展が認められるかについてはのちに本書の第六章で述べよう。

別離 女性と恋愛、このテーマのもとにひとつの選択をなし終えたいま、七十首あまりの詩を通覧して私にはひとつの想いがある。

こうして、三千年にわたる中国の詩詞を、「女性と恋愛」というテーマで拾ってみると、意図して選んだのではないのに、別れ——生き別れにせよ、死に別れにせよ——を慨嘆したうたの何と多いことであるか。古典中国人は、結婚したのち一緒に暮らすよりは、離ればなれにしていることのほうが、むしろ常のかたちであったかにみえる。しあわせな結婚生活を送ることは、それとも所詮、まったくの僥倖なのであるうか。

VIII 主体の喪失

ふたつの欠落 女性も対等な一方の行為者とする恋愛詩の担い手がおもに男性であったこと、それは中国語で表現された恋愛詩の一大不幸であった。女性が、成熟した女性であれば当然めざすであろう官能の充足とは全く無縁の立場から、こうした詩がえてして産出された。

その一例としては、晩唐ばんとうの詩人、韓偓かふが女性が昼寝するさまをえがいた次の二句をみておけば充分であらう。

撲粉更添香体滑

粉おしろいを撲うちちて更に添ましたり、香かぐわしき体からだの滑すべらかなるを

解衣唯見下裳紅

解ほどけし衣ころもより唯ただだ見る、下裳したばきの紅くれなゐなるが

この二句から我々はどうのように恣はしな想像さうぞうをしても差しつかえない。そのように詩句が作つてあるのだから。韓偓が我々に示してくれたものは、昼寝する女性というよりは女体にょたいである。

かみなりにへそもかくさぬ女かな 荷風

と同質の爛熟がここにある。これもまた、文学ではあるけれど、ただし、主体の一方を完全に喪失したままに成立した文学で、それはある。

恋愛詩の担い手

さきに見てきたように、中国の恋愛詩は、正当な文学の場から閉めだされたところに

成立した。また同時に、今みたように、主体の一方を喪失したままに、それは成立した。中国の恋愛文学はこうして、ふたつの欠落をもちつつ産みだされてきたのである。